

パレット



風が吹き渡る。風に匂いはないのかな。
あたしはふと思う。今、あたしが感じるのは
土手の草の匂い。そして流れる川の匂い。
そしてあたしの匂い。世界が混ぜこぜ。この
世界に、風の匂いはないの？

気配を感じた。見なくても分かる。

「やってやった？」

そう言って、カヤがあたしの隣にすとな
と座る。制服のスカートが大げさなくらい、
ふわりと舞う。

「やってやった」

あたしは彼女を見ないまま答えた。きっと
制服のポケットに指を入れる。あたしの体温
に温もったそれは、ちゃんと中に収まってい
た。でこぼことした表面をきっと撫でる。

「今頃、絶対困ってる。あいつら」

カヤが膝を抱えながら言った。うん、と
あたしは頷く。

「ざまあみろだ」

「ざまあみろだ」

調和した言葉が風に飛ぶ。きっとカヤの頭の中にも、夕暮れの光に溢れた美術室が浮かんでる。窓は開け放たれて、白いカーテンが翻ってる。あたしは目の前で風に揺れる草の緑を見た。一瞬、色というものを見失う。

「言った通りにした？」

真っすぐ前を見つめながら、カヤが言う。

「言った通りにした」

あたしは答える。

「赤」

「赤」

また言葉がハモる。

「とってやった」

「とってやった」

「あいつらの」

「あいつらの」

「赤い絵の具」

「あか」

言いかけて、あたしは黙った。ポケットにある絵の具に、きつと上から触れる。あいつの絵の具箱からとってきた、一色の絵の具。

目の前の緑に、幻の美術室が浮かび上がる。向かい合う二つのイーゼルとキャンバス。向かい合う、あいつとノン。

カヤとあたしとノン。いつも一緒の三人。何をするにも一緒。見るものも一緒。聞くものも一緒。好きも嫌いも一緒。だからあいつのことも、三人一緒に好きになった。三人で一つの恋をしていた。

でもあいつは、ノン一人を選んだ。世界は分離した。

風が吹き渡る。いつもの風景は一つの欠片を失っていた。あいつとノンのパレットも、きっと今頃、一つだけ色を失っている。

奪ってやろうよ。同じ色。そう言い出したのはカヤだった。

あいつとノンの絵の具箱から、同じ色奪ってやろうよ。同じ色がなくなれば、貸し合うこともできなくて、きっと困るよ……

美術の卒業制作が終わっていない二人は、今日の放課後、美術室に残って絵を完成させなければならぬのだ。

色がなければ、多分ほかの誰かに借りる。
そんなこと分かってる。

でも果たされなければならぬのは、世界
を壊した二人への、壊れた世界に残された
二人からの、ささやかな意地悪なんだ。

二人から奪う色を赤にしたことに理由はない。
ただなんとなく。

カヤがノンの赤い絵の具を奪う。

あたしがあいつの赤い絵の具を奪う。

カヤは昼休み、あたしがノンを連れてトイレ
に行ったすきに。

あたしは掃除の時間、ゴミを集める振りを
して。

掃除の時間、あたしは教室後方のあいつの
ロッカーに近づき、素早く端に押し込まれてい
た道具箱を抜き出した。

自分を急かす心臓のせいで、手が震えてる。
あたしは道具箱を開け、中にある絵の具箱の
蓋も開けた。不恰好に潰れた絵の具が並ん
でる。

あたしの目は赤を探した。あいつがよく使う色なのか、赤い絵の具は一段と潰れて隅に丸まっていた。指を伸ばした。そして――

ふう、とカヤとあたし、同時にため息をついた。ざあっと土手の草がいっせいに揺れた。

「見せて。赤い色」

カヤがつぶやく。あたしはぎくりとする。

夕方の光は真っ赤だった。たとえ赤の色がなくても、この光で、絵を赤く染めることができそうだ。

「カヤ」

あたしは下を向いた。短くしたスカートの裾が、腿の上ではためいてる。ポケットに手を入れた。絵の具箱から持ってきた、あいつの欠片をきつと指で包み込む。

「あのね、カヤ」

「いっせーのせ、で見せよ。いくよ」

カヤもポケットに手を入れた。あたしはくっ
と膝小僧をすり合わせた。手に触れる絵の
具を指先でなぞる。

世界はどこから始まって、どこまで広がっ
ているんだろう。みんな一緒。嘘はない。ど
こまでも続いているはずだった。でも今、あた
しがいるのは、世界のどのへんなんだろう。

「いっせーの、」

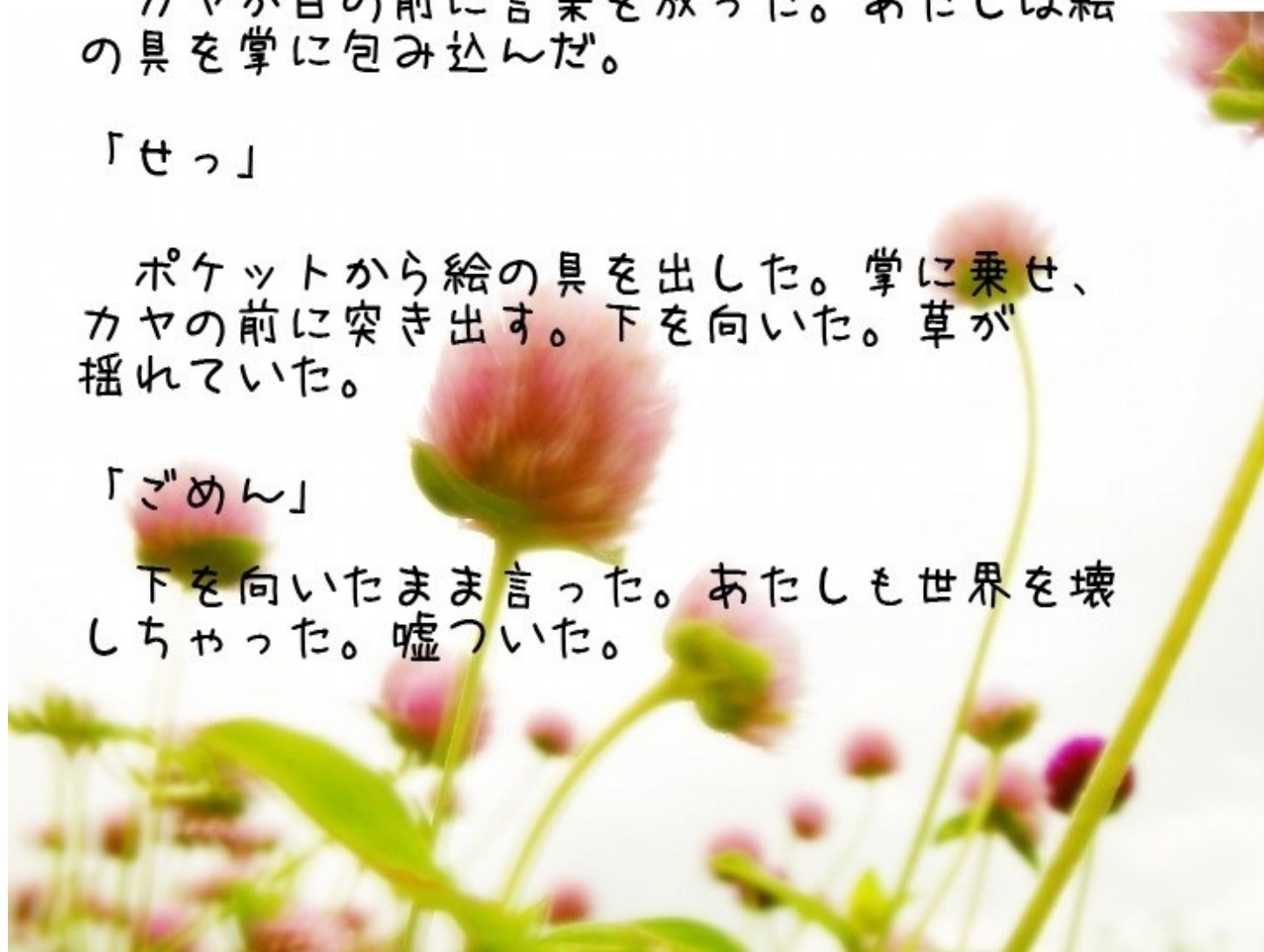
カヤが目の前に言葉を放った。あたしは絵
の具を掌に包み込んだ。

「せっ」

ポケットから絵の具を出した。掌に乗せ、
カヤの前に突き出す。下を向いた。草が
揺れていた。

「ごめん」

下を向いたまま言った。あたしも世界を壊
しちゃった。嘘ついた。



あたしの掌にあるのは、青い色だった。



二人とも黙っていた。掌にカヤの吐息を感じた。カヤが風。あたしが草。

「なんだ」

やがてカヤがつぶやいた。草がどきりと揺らいた。

「同じだ」

あたしははっと顔を上げた。彼女の顔を見て、それからその手にある色を見た。目を見張った。

彼女の手にあるのは、緑の絵の具だった。

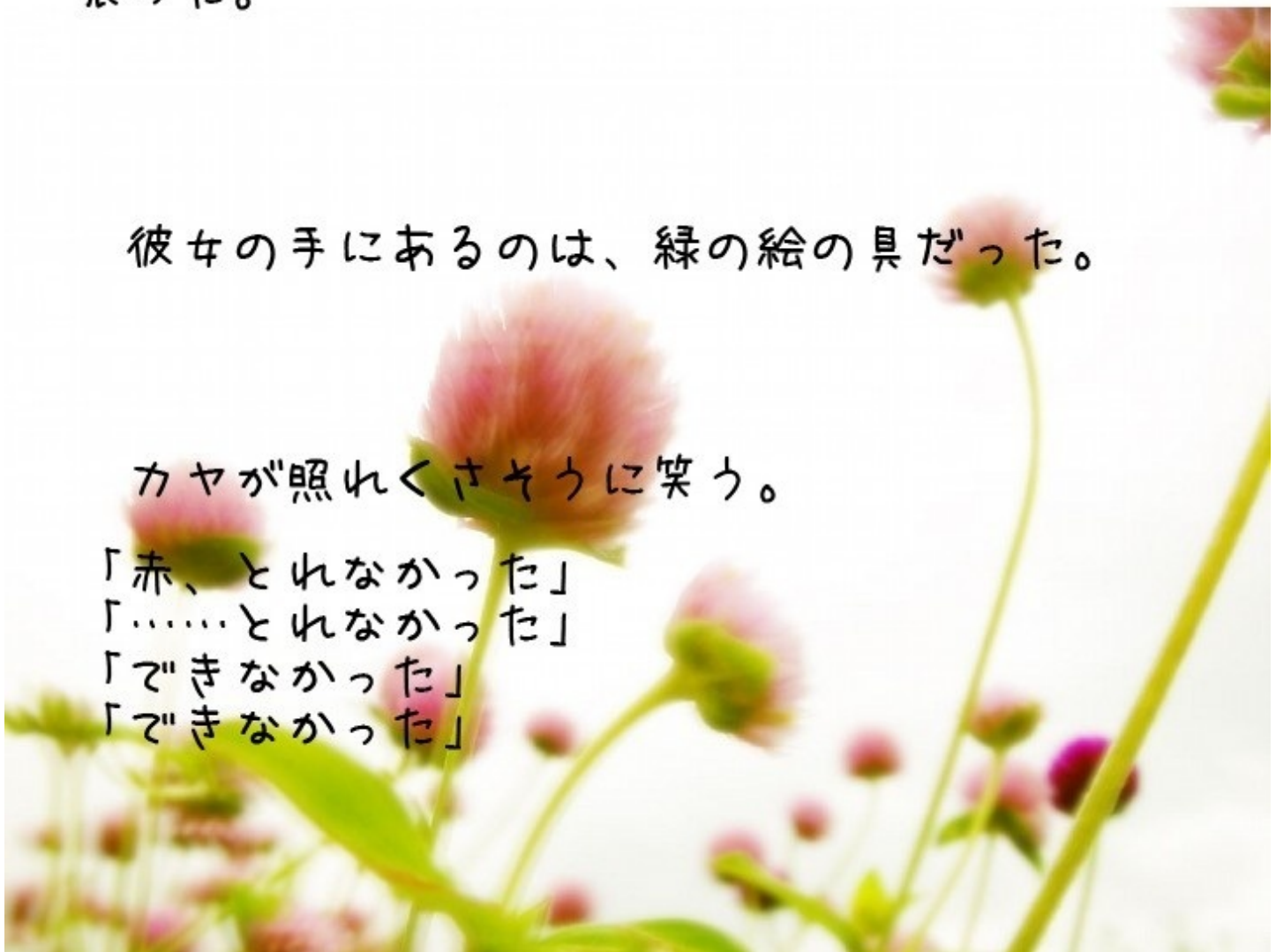
カヤが照れくさきうに笑う。

「赤、とれなかった」

「……とれなかった」

「できなかった」

「できなかった」



「やっぱ、困るかなって思って」
「うん。困るかなって思った」
「なんかやっぱ、それはヤだった」
「うん」

顔を見合わせた。同時に笑った。

「同じだあ」

そう叫ぶと、あたしたちは草の上にひっくり返って笑った。二人の掌の絵の具が跳ねる。青と緑が、あたしたちの間に落ちる。

空と草と、あたしたち。

世界はやっぱり、ここにあった。

